

## 2. 「公共性育成プラン」と子どもの学び（ことば）

### ■低学年の対話する子どもの姿

「共感する・応答する・ことばで関わる」

#### (1) イメージを重ねる対話

物語「ニャーゴ」の読みの学習。写真1は吹き出しに書き込んだ主人公の気持ちを発表している場面である。

言葉は教師に向かっているが、友だちの言葉を受けてイメージが付け足されていく。K男は友だちのことばをつないで自分のイメージをはっきりさせようとしているし、R男はノートに書いた自分の考えと発言が変わっている。

写真1 自分の読みを表現する



S子：「食ってやる」だから、本当に食べたい気持ち。

R男：似てる。我慢できない気持ち。

H男：もう、終わりだ。

K男：我慢できないの上に付け足しなんだけど、本当

に食べたくて、もう我慢できない。

S男：ももを我慢してよかった。あのね、ねこはももよりねずみが好きなんだから、ももを食べちゃったらねずみが食べられないでしょう。

この場面ではイメージの共有はされるが応答は見られない。教師を介したつながりを子ども同士の応じあいにしていく必要がある。

#### (2) 対立から始まる対話



「ねずみは親切なのか」人物像や親切という言葉の意味について意見の対立が起こった。二人は前後の席だが、これまで教師に向かっていた視線が互いに向き合う。二人が意見を言い合うことで周りも黒板から二人に目線が向く。子ども同士のことばが直接つながり、教室が対話的な空間になった。

でも、ちょっと親切とは言えないんじゃないの。最初お話を聞いていなかったんだから。

意見だけど、知らないんじゃないですか。ねこは、ねずみが聞いてなかったことを。

どうして違うのかを自分の言葉で説明することで、どの言葉を根拠にしたのかが周りにも見えてくる。

### ■3年生の実践 「ゆうすげ村の小さな旅館」(東京書籍上)

「ゆうすげ村の小さな旅館」の実践では、子どもたちのこんな言葉のつながりのある場面が見られた。話し合いの課題は『みづき(宇佐見 美月)が「ウサギ」だと分かる場面を探そう』である。

E：「うさみみづき」という名前が「み」を「ぎ」にすると、「うさぎみづき」になる。

F：あ、みづきという名前、月見じゃん！

F：「みづき」は、見(み)・月(づき)だから、「月見」と読める。

M：お父さんもいるから、(お父さんと美月で)2匹いるから。(月のうさぎのもちつきのイメージで語る)

H：みづきは、(名前が)月見だったらよかったのに。

S：漢字で「宇佐見 美月」で、月見という漢字がちゃんとできています。

登場人物の「宇佐見美月」という名前から、様々なイメージが生まれ、発言のつながりが生まれた場面と言える。児童Eから氏名の「み」を「ぎ」にすると「うさぎ」になる、という気づきから「お月見」のイメージが生まれた。また、Mの説明がやや不足している「2匹いるから」という発言についても、否定することなくつながりは生まれていった。ここでは一人ひとりの気づきを否定するような発言がなかった。「言葉をつなぐ」という資質を育む上でまず、中学年ではこうした他者の発言を受け入れる姿勢からさらなる豊かな「言葉のつながり」が生まれてくると考える。

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（市民）

「市民」部で育てたい「公共性リテラシー」は、社会的価値判断力や意思決定力を育てる活動を通して、

ア：社会的事象や、観察したことや資料を正確に読み取り、論点を取り出す。

イ：読みとったことを、自分の主張の根拠にして、意見を述べたり提案したりする。

ウ：多面的（他者の視点）な見方を考える。

エ：なるべく多くの人々が幸せになれる条件を探して、折り合い、決定する。

の4点を考えている。

以下は、「市民」の学習活動を通して見えた、子どもの学びの姿である。

### (1) 5年生1学期に見えた子どもの学びの姿

- ・話し合いの際には、ただ意見を述べるのではなく、考えの根拠となるところを明らかにして、自分の考えを述べるようになってきた。
- ・わからない言葉や疑問をもったことは、素通りしないで、質問する姿があった。クラス全体としてはまだまだであったが、少しずつ、他の子どもたちにも、培っていきたい。
- ・本音と建前がある中、本音を出させる手立てをとることで、自分の中での違いに気づけた。



1学期は、話し合いを多く取り入れる「市民」の学習として重要な、根拠をもって自分の考えを主張したり、友だちからの賞賛や反論を得るという「公共性リテラシー」について、時間をかけて、丁寧に育てていくよう心がけている。

### (2) 6年生3学期（昨年度）に見えた子どもの学びの姿から

- ・「たった一つの高速道路という問題で、よい点や悪い点がたくさん出てくることに驚きました。」  
「いろいろな立場でこの問題を見てみると、いろいろなことが出てくると  
思います。」などと、立場を変えると、見方も様々に変わってくるということに気付いた子どもたちが多かった。
- ・高速道路を無料化すると、観光地は活性化するが、公共交通機関はつぶれるなどいいこともよくないこともあることがわかった。

場面設定は「高速道路を無料化にすると、地域と経済を活性化し、国全体を元気にするだろうか。様々な立場からこの問題を考えよう」である。一つの問題にも、社会の様々な立場によって意見は違ふし、他者の視点に立って、考えようとする意見が多く出てきた。また、自分とみんなの利益は必ずしも一致しないということも理解できてきた。しかし、お互いの利益を最小限にするためには、どうお互いが調整していかねばならぬかまでは至らなかった。

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（算数）

3年「重さ」平成22年5月21日 授業者：富田京子

本時は、学習計画（7時間扱い）の中の第2次「4つの重さを比べてみよう」第1時である。  
本時のねらいは、次の2点。

- ・4種類（米・砂糖・塩・小麦粉それぞれ1カップ）のものの重さについて感じる。
- ・「重さくらべ（重さの直接比較）」をする方法を考え、見通しをもつ。

まず、4つの素材が提示され、重さ比べについて考えることが確認された。それぞれの重さについて自分の経験や考えを出し合ったあと、いよいよファミリーでの活動である。

それぞれのファミリーで、実際に手で触りながら、重さ比べをする。

### 1ファミリー

I男「塩は絶対重い。持ってみてわかるよ。次は米じゃない？砂糖より米の方が重いよ。一番軽いのは、小麦粉。」

M美「持ってみてわかっちゃうのはいいのかな？米と砂糖はどっち？」

O男「シーソーみたいなのやってみたら。」（4ファミリーをちらっと見て）「落としてみる？」

I男「落とすのじゃわからないよ。たぶん。違うやり方を考えようよ。つるしてみる？」

M美「つるすのって、どうやるの？作れる？」

### 4ファミリー

N子「落としてみると、重い方が先に落ちる？」

K太「いっしょに落とさないといけない。せいの！1人が持って、落としてみればいいんだよ。」

R美「よく見ててよ。もっと高くから落とすと良いのかな？ほら、塩が速く落ちた。」

K太「え～、本当かはわからないよ。」

N子「絶対できるよ。やってみよう。」

1ファミリーの話し合いでは、I男が、「持ってみて一番重いのは塩で、一番軽いのは小麦粉だ。」と発言している。M美、O男もその2点については異論はないようである。

塩が一番重く砂糖が一番軽いということがまちがいなければ、全体の重さの順位を調べるためには何を調べればよいか、を考えている。そして、米と砂糖のどちらが重いかが分かれば4つのものの重さの順位が決められると考えている。これは「公共性」育成プランの中学年ア「既習事項をもとに類推的思考や帰納的思考を用いて、論理的に解決しようとする」に該当する。

4ファミリーの話し合いでは、落とすことによって、重さを比べようとしている。K太は、同時に手を離さないと比べられないこと、R美が、できるだけ高いところから落とした方が差が明確になることに言及している。これは、育てたい「公共性リテラシー」のエ「様々な解決の中から、話し合いを通して、課題場面に適した方法を判断する力」に該当する。中学年エ「条件と関連付けて」判断をしようとしている。

さらに、どちらの話し合いでも、中学年ア「友だちの疑問に関心をもち」姿が見られる。



## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（自然）

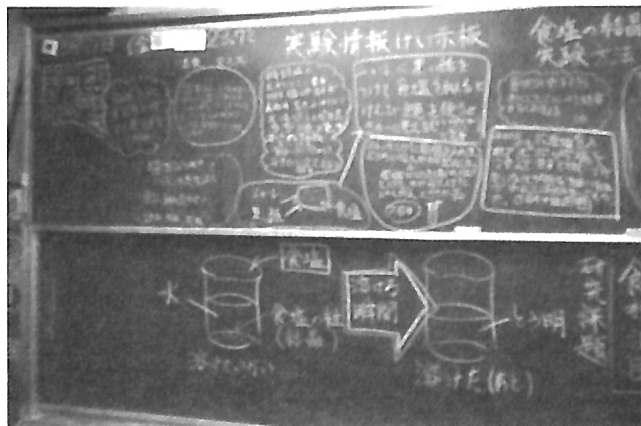
以下は、自然の授業における子どもの姿の例として、5年「ものの溶け方」における、子どもの活動である。本校では、本単元を「粒子概念」の入門期的な扱いととらえ、「変化の瞬間」を見逃さないということを大切にしている。その為の実験方法を考える、観察力を養う、個々の考えを全体で共有する、といった観点を重視している。この例では、「食塩が水に溶けて見えなくなる、瞬間の目撃者になろう」という活動をあげた。



子どもたちの活動班は「研究所」と呼ばれる。実験の目当てに対し、それぞれの「研究所」で方法を考え、器具の準備や観察方法も、自分たちで考えながら進める。最初は「個」（一人）の考え、それが「研究所」（少人数）で深められ、やがてクラス全体へと波及され、次第に高め合ってゆく姿が見られる。



実験室にある器具は、特別なもの以外は、自由に使って良い。もちろん安全が最優先である。ガラス器具、顕微鏡といった、さまざまな道具を使って実験に没頭する姿は、まさに「子ども研究員」である。



「溶ける瞬間」がよくわかる方法が見つかったと、「研究所」を超えて子どもが集まり、観察し論議し合う。黒板は実験情報掲示板として活用され、最新の情報を常に共有し、高め合う為の手段の一つとなる。

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（音楽）

ここでは、9月に行われた4年1組「音楽物語をつくろう」の授業から子どもの姿をとりあげる。

### (1) 登場ネコをイメージした音探し、音楽づくりで、つぶやきが広がる

★ドラム、レインスティック、ギロを使った発表を聴いて  
T：この音からどんな場面が浮かぶかな。  
C：ボンバルリーナ！女王ボンバルリーナの登場。  
C：え。ボンバルリーナはもっと豪華なんじゃない。  
C：ジミーはもっと高い音の気がする。ジミーじゃないよ。  
C：ボンバルリーナの方がもっと高い音なんじゃない。  
C：なんか、（太鼓の）鳴り方が違うんで距離を感じる。  
発表したC：うん、足音になるかなあとは思ったんだけど。  
C：そう、違う音を順番に叩いているから行進のようだ。



★トーンチャイムでの2種類の演奏を聴いて  
ド・ミ・ソの調和音が一齐に鳴ると  
C：いい感じ（おお！きれい やつらいなど）  
みんなの視線が集まりじっと聴いている。  
次に、不協和音をバラバラに鳴らす。  
C：あ、これもいい感じ  
C：好き勝手にならすのがボンバルっぽい  
C：いい加減さが何となくあってる気がする  
C：なんか上品っぽいし  
C：お触れの場面にも使えるんじゃない？

様々なつぶやきが、学習空間を行き交っている。

音とイメージを結び付けるものは、速度や音色・音の質感であったり、漠然と思い描く登場ネコの雰囲気であったりと、その子によって異なる。しかし、音楽部が公共性育成プランの目標に掲げた「からだまるごとで音楽を受けとめ、自らの思いを表現していこうとする姿勢」や「他者と交流・触発し合い想像力や創造力を磨き、他者との異質性を認識し、認め合いながら生成していく」子どもの姿が、ここには素直に表れていると言えよう。またトーンチャイムの場面では、協和音・不協和音の響きを聴く時間を教師が意図的に設けている。子どもたちは音の構成による感じ方の相違に気づき、それをことばで表現しようとする行動へつながった。安心して批評しあうことのできる共有空間だからこそ生まれたつぶやきであり、授業デザインの大切さが改めて確認された。

### (2) 互いの息遣いを体感することで、聴きあいが深まる

右はリコーダーを2部で演奏している様子である。お互いの表情を見合いながら演奏することで、呼吸が次第に合っていった。息づかいを聴覚だけではなく、視覚からも感じる距離から、「ともに身体を委ねあいながら、連動して響きあう」心地よい公共空間が生まれていたのだと捉える。

### (3) 個々の興味関心が、他者と交流・応答する中で高まる

授業は、自由な音づくり（個人）→息を合わせた演奏→発表・批評→自由活動（個人）→新たな提示へと展開した。仲間の発表を聴きあうことで、子どもの内面に新たな表現欲求が生まれている。K子はトーンチャイムを使った発表に興味を示さないように見受けられたが、最後の自由時間では飛びつくようにトーンチャイムに向かっていった。彼女の内面を揺り動かす出会いがあったのだと捉えられる。

授業を参観した方からは「合意形成に至る葛藤のプロセスを大事にして取り組んでいることがわかった」という評価もいただいた。友だちの演奏を受けとめ、触発されて、新たな表現欲求をもち、活動に参加していく。この経験の積み重ねが、自らの思考を深め探求力を育てるのではないかと考える。

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（アート）

2010.9.21 アート6年3組「なりきりアート」

本題材のおおきなねらいは、題材名「なりきりアート」であらわされているごとく「なりきる」ことである。第一に「歴史上の人物になりきる」。第二にチーム内での役割分担「モデル、プロデューサー、スタイリスト、カメラマンになりきる」ことである。この二つの観点から子どもの活動を見とって見た。

### 〈豊臣秀吉チーム〉の活動より

活動1は資料の秀吉の絵のイメージに基づいてモデルの顔におしろいを塗っているところである。秀吉役の子どもは、目を閉じ、白粉を塗られるモデルになりきり、手に持った鏡に映る自分の顔の変化を想像し、期待しているかのように笑みを浮かべていることからなりきることを楽しんでいることが伝わる。

白粉を塗っているプロデューサー、それを見守るカメラマン。男女が良い雰囲気共同活動に取り組んでいる。



活動1

活動の状況を記録するためにカメラマンが撮影する一方、他チームのカメラマンがモデルに現状をカメラのモニターを目の前にかざしている。自分の役割の立場で他チームに関わる正統のおせっかい。結果としてリアルタイムの活動をふりかき。本校「アート」の領域「見る楽しみ（鑑賞）」の能力が発揮され、「公共性」育成プランにおける批評・提案が交流されている場面でもある。カメラマンは進捗状況をとらえつつも、感性を働かせて自分のイメージと比較しながらシャッターチャンスをおねらっている。そこにカメラマンとしての「なりきり」感覚が形成されていると言える。



活動2

活動3はスタイリストとカメラマンが秀吉の烏帽子を共同で製作している様子である。烏帽子の半球状の形状の再現及び着色の活動については、アートの既習の技術や身の回りの造形的な作品など情報を生かしながら製作していることがうかがえた。また、ここでは、決められた役割分担にかかわらず、メンバーの特性や資質に従って暗黙の了解の下、自然発生的に役割分担が統合される。このことは「私」らしさを追求する必然的な基盤としての「あなた」らしさを認める「公共性」リテラシーの表れと考えたい。



活動3

活動4は、このチームの総仕上げである。化粧、装身具衣装、ポーズなど、協力して準備したものや情報を役割分担を越えて全員で仕上げている様子である。この活動を通して共感や賞賛を受け止めながら形成してきた「なりきり」のイメージに照らし合わせながら、完成を見守っている雰囲気に包まれている。造形的な創造活動を通して共同の活動から協働の活動へと昇華した場面と考えられる。



活動4

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（生活文化）

以下は、5年生の「調理に挑戦」という単元における調理実習で見られた子どもの姿である。本時は、身近な調理の名人として本校の給食調理担当の青柳チーフをお招きし、「お茶小流いり卵」の作り方を教えていただいて実際に実習をした。実習後は青柳チーフへの質問と、チーフの調理に対する思いや工夫を聞くという活動をおこなった。



写真に示したように、名人が示範したお茶小流いり卵の作り方は、子どもたちがあらかじめ家で調べてきたどのやり方とも異なり、ボールに卵液と調味料を入れて湯煎をしながら泡立て器でかき混ぜるといいう調理法であった。菜箸とフライパンを使う「我が家流」ではない「みんなにとって初めての作り方」が授業の冒頭に示されたことで、既成概念を崩された子どもたちは「本当にあのやり方でできるのか」と感じ、「やってみたい」という活動の意欲が引き出されたといえる。これより前に、給食室で800人分のいり卵を作る様子を視聴していた子どもたちは、チーフがいり卵を作る様子を真剣に見つめ、本時の活動の全体イメージを共通理解するとともに、グループで行う活動のゴールを明確に獲得した。

このように、子どもたちのやる気を引き出す授業の素材と、活動の全体像をわかりやすく提示することが、「生活経験の異なる友だちとともに調理実習を行うことを通して、食生活に関する経験を豊かにし、実践する意欲を高める」（子どもの姿イ）ことにつながったといえる。



調理実習の場面では、グループの中で公共的なかわりが見られた。本時における公共的なかわりとは、そのときの活動において、グループの皆にとって価値がある活動をしている姿ととらえた。

たとえば女子が調理を行い男子が主に後片づけを行っていたグループでは、片づけを担当していた子どもも、それが全体の作業の流れの中で役立つ作業であることを理解していた。あらかじめ役割分担せずとも、お互いがグループの友だちのことを意識しながら仕事を分担しているところに、「計画から片づけまで協力し、グループの中でできることを考えてやり通す」（子どもの姿イ）姿を見とることができた。

また本時の活動を経験した後に、家庭でもお茶小流いり卵を作って、家族に食べてもらった子どもがいた。中には「茶巾しぼりにして、お父さんと妹の弁当の中に入れる」「チャーハンの中に入れる」など、食べ方や調理法の工夫をし、家族に喜ばれたという報告もあった。「身近な名人との交流を通して、生活をよりよくするためにはどうしたらよいかを考え、実践しようとする」（子どもの姿ウ）子どもの姿がみられた。

## 「公共性育成プラン」と子どもの学び（からだ）

### ○テーマを設け、自分なりに動きを探る時間を大切にする授業づくり

「からだ」では、公共性の中心に「感覚」を位置づけた授業づくりを行ってきた。例えば4・5・6年生の「水泳」の授業づくりで大切にしていたことは、子どもたちが大枠のテーマを介して対話を行い、自分たちなりの動きを共有する時間や空間を設けたことである。授業者は、近代泳法を一方向的に伝達するのではなく、子どもたちの感覚を大切することを心掛けた。実際の授業では「自分なりに見つけた動き」を友だちと共有し感覚を伝え合うことで「動きや感覚を楽しんでいる」姿がどの学年でも見取ることができた。以下に具体的な姿をあげる。



### ○中学年の「他者と動きを共有し、共に行う」活動から

4年生「水を感じよう」の学習は、他者との違いを発見し、楽しむため、男女混合・技能差もある普段のファミリー（生活班）を基盤として展開してきた。その中で「ファミリーでス～を感じる」活動では次のような場面が見られた。

\* U男とM彦はプール内の腰掛け台に座って、手振りを交えて相談する。  
U男：「せーの！」 \* 二人はゆっくり泳ぐ。反対側のプール内の腰掛け台に座る。  
U男：「バツみたいに3回泳いだら、足をビューンと出すよ。見てて。」  
\* 『ス～』と泳いでから足を出す。その後、反対側のプール内の腰掛けに座り再び相談する。  
そして『背泳ぎ風の動き』をする。  
教師：「何？ ゆっくり背泳ぎ？」 U男：「ちがう。上見ると、すごいデコボコ！」

U男は、教師の言葉かけとは外れた返答をするが、自分が発見したことに喜んでいる。この後も二人は共に泳ぎ、往復しながら一回一回腰掛け台に座り、楽しそうに話していた。このように活動を変化させながら授業に参加していたのである。

これは公共性育成プランに示した「いろいろな動きを見つけ、友だちと伝え合う」姿であり、「動きや感覚を楽しむ」姿と捉えることができる。水中では会話をする 것도相手の表情を見ることもできないが、相手の気配から状況を感じ、共に行うこと自体に喜びを感じていたのではないだろうか。



### ○高学年「自分なりの動きを見つける」活動から

6年生の水泳では、「水の中を効率よく進むにはどのような体の使い方があるか」というテーマのもと「自分なりの動きを見つける」活動を行った。活動中に次のような場面が見られた。

\* 潜水で進むのが一番気持ちよく進めると感じているS太とT郎  
S太：「水中では平泳ぎのほうが進むよ。」 T郎：「水中でクロールはできないよな？」  
S太：「え、わかんない。やってみようか。」  
\* 共に水中でのクロールを何度か試みる。互いにプールの反対側まで進むことができた。  
S太：「できたー。」 T郎：「先生、クロールで潜水できたよ。」

できた喜びを互いに共感した姿である。ただ手を回すだけでは抵抗を受け不自由さを感じてしまう水中でのクロールだが、「自分なりに」動きを洗練させ、効率のよい腕の使い方を発見することができた。活動の課題自体を自分たちで生み出し、「自分なりに見つけた動き」を友だちと伝え合ったり、まねしたりすることで「より良い動き」に迫ろうとしている姿と捉えることができる。